

## 2種類の右枝節点繰上げ構文\*

木 村 宣 美

### 0. はじめに

右枝節点繰上げ (Right Node Raising: RNR) 構文とは、等位構造 (coordinate structures) のすべての等位項 (conjuncts) の右側に共通にある要素 (以降, RNR要素) が、等位接続された節や句等の一番右側の等位項 (rightmost conjunct) に生起する構文のことである。<sup>1</sup> RNR構文の特性を、まず最初に、次の (1a, b) を例に取り、概観する。

(1) a. Louise writes, and Thelma recites, epic poetry. (Haegeman and Guéron 1999:52)

b. He ought to, but probably won't, make a public apology.

(Huddleston and Pullum 2002:1343)

(1a) のRNR構文のRNR要素はepic poetryで、(1b) のRNR要素はmake a public apologyである。(1a) のRNR要素epic poetryはwriteとreciteの項 (argument) で、(1b) のmake a public apologyは助動詞toとwon'tに後続する動詞句 (verb phrase: VP) である。この構文に観察される特徴として、特殊な韻律上のパターン (specific prosodic pattern) があることが報告されている。例えば、Haegeman and Guéron (1999:52) は、(1a) では、LouiseとThelma及びwritesとrecitesに、それぞれ、対照強勢 (contrastive stress) が置かれ、RNR要素であるepic poetryにも強勢が置かれることが指摘され

---

\* 本研究は、平成22年度科学研究費補助金 ((基盤研究(C)) 研究課題『句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(課題番号22520487)) 及び平成22年度弘前大学人文学部長裁量経費 (申請課題: 共同研究プロジェクト『テキストから読み解くヨーロッパ文化の諸相』) に基づく研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 等位構造がRNR構文の生起する典型的な領域 (domain) ではあるが、従位接続詞が含まれる構造においてRNRの適用が認可される場合がある。しかしながら、(ii) が示しているように、認められない場合もある。

(i) a. Thelma suspects, though she cannot assert, that this message was sent from abroad.

(Haegeman and Guéron 1999:52)

b. Of the people questioned, those who liked outnumbered by two to one those who disliked the way in which the devaluation of the pound had been handled. (Hudson 1976:550)

(ii) a. \*That Alice composes makes it likely that Fred enjoys listening to, organ fugues.

b. \*Although Fred puts up, his brother defaces, billboards. (McCawley 1988:527)

Kimura (1985) では、副詞節 (adverbial clause constructions) や疑似等位構造 (quasi-coordinate structures) においてRNRの適用が認められる場合と認められない場合が、指摘されている。詳細は、Kimura (1985) を参照のこと。

ている。第2に、Ross (1967:97-98)によれば、RNR構文は等位構造縮約 (Conjunction Reduction: CR)<sup>2</sup>が適用されて導かれる構文で、RNR要素 (the element adjoined to the coordinate node) は、すべての等位項 (each conjunct) に生起し、全域的 (across-the-board) でなければならない。(なお、these grapesの本来の位置を示す\_ は、筆者が書き加えたものである。)

- (2) a. Tom picked \_ , and I washed \_ , and Suzie will prepare \_ , these grapes.
- b. \*Tom picked \_ , and I washed some turnips, and Suzie will prepare \_ , these grapes.

(2a) と (2b) の文法性の違いは、(2a) では、すべての等位項に共通にthese grapesが存在するが、(2b) では、2番目の等位項にsome turnipsがあり、すべての等位項に共通にRNR要素がなければならぬとするRoss (1967) の条件が満たされていないことによる。この条件が正しいとするならば、(1) に対して、(3) に示されているような基底構造を仮定することができる。

- (3) a. Louise writes epic poetry, and Thelma recites epic poetry.
- b. He ought to make a public apology, but probably won't make a public apology.

本稿では、すべての等位項に等しくRNR要素が生起すると考えることのできる、(1)のようなRNR構文を「全域的RNR構文」と特徴づけることにする。

また、Abbott (1976)やJackendoff (1977)等が指摘するように、対称的述語 (symmetric predicates)<sup>3</sup> がRNR要素となり、基底構造を仮定できない場合がある。この点を、次の(4-5)を例に取り、考えてみよう。

- (4) a. I borrowed, and my sisters stole, a total of \$3000 from the bank.
  - b. I borrowed a total of \$3000 from the bank and my sisters stole a total of \$3000 from the bank. (Abbott 1976:642)
- (5) a. John whistled and Mary hummed at equal volumes.

---

<sup>2</sup> RNR構文を導く規則として、Ross (1967)はCRを、Maling (1972)は節点上昇 (Node Raising : NR)を提案している。NRはCRと同様に、等位項の右側に共通に生起する構成素をチョムスキー付加し、もともとの構成素を削除する規則である。

(i) A Node Raising rule which Chomsky adjoins a constituent, creating a new node and deleting all identical lower occurrences of that constituent. Node Raising raises any clause-final identical constituent, including verbs, before deleting all lower repetitions of that constituent. The string left behind is not necessarily a constituent. (Maling 1972:103)

<sup>3</sup> Lakoff and Ross (1970:271)は、等位接続された文にパラフレーズできる場合とパラフレーズできない場合の統語的な違いを指摘している。例えば、等位接続された文にパラフレーズできない場合が、次の (ia, b) である。

- (i) a. Ann and John are similar.
- b. \*Ann is similar and John is similar.

(i) の文に含まれている述語 (be) similar等に対して、本稿では対称的述語という用語を採用することにする。

b. \*John whistled at equal volumes and Mary hummed at equal volumes.

(Jackendoff 1977:192-193)

(4a) のRNR要素a total of \$3000 from the bankを、すべての等位項に生起する文(4b)を設定することはできるが、その構造(4b)を(4a)の基底構造であると考えすることはできない。何故なら、意味が同じではない(nonequivalence)からである。また、(5)のRNR要素at equal volumesは、(5b)が非文法的であることから明らかのように、(1-3)に見られるような全域的な対応関係は観察できず、すべての等位項にRNR要素が一律に生じる基底構造を仮定することはできない。このように基底構造を仮定することのできない(4a)や(5a)のようなRNR構文は「対称的RNR構文」であると特徴づけることができ、全域的RNR構文と区別されなければならない。

RNR構文の派生過程(derivational processes)に関する典型的な分析は、概略、移動分析(movement analysis)・削除分析(deletion/ellipsis analysis)・多重支配分析(multi-dominance analysis)の3種類の分析に分類することができる。<sup>4</sup>

(6) a. 移動分析：

Ross 1967; Maling 1972; Postal 1974; Hudson 1976; Hankamer 1979; Sabbagh 2003等

b. 削除分析：

Neijt 1979; George 1980; Wexler & Culicover 1980; Banfield 1981; Hartmann 2000;  
Bošković 2004; Abels 2003; Ha 2006; Chalcraft 2006; Ince 2009; An 2009等

c. 多重支配分析：

McCawley 1982; Levine 1985; 原口・鷺尾1988; Wilder 1999; Abels 2003; Kluck 2007;  
Kluch & de Vries 2008等

(6)にまとめられている代表的な3種類のRNR構文に対する分析では、それぞれが異なる分析との比較を通じて、それぞれの分析の優位性をそれぞれが主張している。<sup>5</sup>例えば、削除分析を支持するHa(2006)やInce(2009)では多重支配分析の不備を、多重支配分析を提案するAbels(2003)やKluch & de Vries(2008)では削除分析の不備をそれぞれが主張している。RNR構文に対する適正な分析として、削除分析と多重支配分析のいずれかでなければならないとする研究動向において、本稿の目的は、RNR構文には「全域的RNR構文」と「対称的RNR構文」が存在し、2種類の異なる構

<sup>4</sup> Abels(2003)は、RNR構文に対して、削除に基づく分析を主に展開しているが、後半では多重支配分析の優位性にも言及し、双方の分析の必要性を指摘している。

<sup>5</sup> 原口・鷺尾(1988)は、RNRは規則の存在自体が極めて疑わしく、移動は関与していないと主張している。例えば、Abbott(1976)で指摘されているように、構成素を成していない記号連鎖にRNRが適用されているように思われる例(i)が存在する。

(i) Smith loaned – and his widow later donated – a valuable collection of manuscripts to the party.  
移動規則は構成素に適用されるものであり、(i)のような例に基づき、RNRは移動規則ではないと主張されている。本稿でも、RNRを、重名詞句転移(Heavy NP Shift)を除き、右方への移動規則に関わる現象ではないと仮定する。

造及び派生過程を有する構文として、峻別されなければならないことを論じることにある。その際、RNR要素の位置及びその派生過程に対して、次の2点を組み込んだ分析を提案し、その妥当性を検証することにする。以降、「全域的RNR構文」に対する分析を、Abels (2003) の用語を借用し、RNR構文のin-situ分析、「対称的RNR構文」に対する分析をRNR構文のex-situ分析と呼ぶことにする。

(7) a. RNR構文のin-situ分析 (Kimura 1985, 1986; Abels 2003等):

RNR要素は、一番右側の被接続要素内の元々の位置にある。

b. RNR構文のex-situ分析 (McCawley 1982, 1988; Wilder 1999; Abels 2003等):

RNR要素は、すべての被接続要素に多重に支配されている。

本稿の目的は、仮説 (7a, b) を組み込んだ分析を仮定することで、RNR構文の特異性に、妥当な説明を与えることができることを論じることにある。すなわち、本稿の分析の独創性は、従来のRNR構文に対する分析とは異なり、RNR構文を適切に分析するためには、RNR構文のin-situ分析とex-situ分析の両方を仮定しなければならないとする点にある。

## 1. RNR要素のIn-Situ分析

### 1. 1. 島の条件 (Island Sensitivity)

Wexler and Culicover (1980:301) は、凍結原理 (Freezing Principle: FP) と移動現象の観点で、RNRの特性を検証し、上昇された (raised) と従来分析されてきた節点が元々の位置にある可能性を指摘し、“The argument against RNR is based on the fact that a raised node always behaves, vis-à-vis all constraints on analyzability, just as it would if it were in its original underlying position.”と述べている。凍結原理 (FP) とは、概略、変形が適用されて導かれた派生構造に、更に変形を適用することは許されないとする原理である。もし、RNRが等位項の同一の右枝節点にある要素を上昇させる効果を持つ規則だとすると、RNR要素に対して、更なる規則の適用はできないはずである。

(8) a. Mary buys, and Bill sells, pictures of Fred.

b. Who does Mary buy, and Bill sell, pictures of  $\phi$ ? <sup>6</sup> (Wexler and Culicover 1980:299-300)

FPとRNRに対する移動分析に基づくと、チョムスキー付加されたRNR要素である名詞句pictures of Fred内の要素をWH疑問文で問うことはできないと予測されるが、(8b)は文法的であり、この予測は正しくない。

---

<sup>6</sup> 本稿では、 $\phi$ でWH疑問詞の元々の位置を表すことにする。

次に、関係詞節 (relative clause) 内の要素と WH 疑問文の関連を、考えてみることにしよう。  
(9a) は RNR 構文で、RNR 要素内の名詞句 Fred が WH 移動で問われているのが (9b) である。

- (9) a. Mary buys, and Bill knows a man who sells, pictures of Fred.  
b. \* Who does Mary buy, and Bill know a man who sells, pictures of  $\phi$ ?  
(Wexler and Culicover 1980:301)

RNR 要素 pictures of Fred が移動されているとするならば、(9b) では名詞句 pictures of Fred は、もはや関係詞節内ではなく、WH 疑問文化 (WH Fronting) の適用が許されても構わないはずであるが、実際は、許されない。(9b) が非文法的であることは、RNR 要素に何ら移動規則が適用されてはおらず、もともとの位置に存在する可能性を示唆している。すなわち、複合名詞句制約 (Complex NP Constraint: CNPC) に違反しているから、(9b) は非文法的なのである。また、移動規則と CNPC の観点で、(9a) を考えてみると、RNR 要素 pictures of Fred が移動しているはずはない。もし移動しているとするならば、CNPC 違反で、(9a) は非文法的なはずである。非文法的ではないということは、RNR 要素は移動しておらず、元々の位置にあると分析すべきである。

第二に、等位構造への RNR の適用は構造が並行的 (parallel) である限りにおいて marginally に可能であり、更に WH 疑問文化の適用が許されることが、Wexler and Culicover (1980:302) で指摘されている。<sup>7</sup>

- (10) a. Mary buys paintings of, and Bill buys paintings of and photographs of, sandy California beaches.  
b. ? Mary buys paintings, and Bill buys paintings and photographs, of sandy California beaches.  
(11) a. Which beaches does Mary buy paintings of  $\phi$ , and Bill buy paintings of  $\phi$  and photographs of  $\phi$ ?  
b. ? Which beaches does Mary buy paintings, and Bill buy paintings and photographs, of  $\phi$ ?

(9-11) の文法性が示していることは、RNR 要素は移動規則 (an extraction transformation) が適用されて、何らかの位置に移動されているのではなく、本来の位置にあるということである。

更に、Abels (2003:48) では、島の条件が RNR に課されないことが指摘されている。たとえば、(12) から明らかのように、RNR には WH 島の条件 (Wh-island) が課されない。

- (12) John wonders when Bob Dylan wrote \_ and Mary wants to know when he recorded \_ his great song about the death of Emmett Till.

(12) の RNR 要素は、動詞 wonder と want の目的語である when 節内にある目的語名詞句 his great song about the death of Emmett Till である。移動が関与する左方移動であるならば、WH 島の条

<sup>7</sup> ただし、RNR 要素が等位項全体である場合は許されない。\*Mary buys, and Bill sells cars and, trucks. (Wexler and Culicover 1980:302)

件への違反で非文法的となるが、(12) が文法的であることから、RNRには課されないことがわかる。

また、RNRには付加詞条件 (Adjunct Condition) も課されないことが、Abels (2003:48) で指摘されている。

- (13) Josh got angry after he discovered \_, and Willow quit after finding out about \_ the company's pro-discriminatory policy.

(13) のRNR要素は、付加詞であるafter節内にある目的語名詞句the company's pro-discriminatory policyである。移動が関与する左方移動であるならば、付加詞条件への違反で非文法的となるが、(13) が文法的であることから、RNRには課されないことがわかる。Abels (2003) のRNRには島の条件が課されないとする指摘から、RNR要素に移動規則が適用されて、何らかの位置に移動されているのではなく、本来の位置にあるということがわかる。

さらに、Abels (2003:46-47) では、RNRは右屋根制約 (Right Roof Constraint: RRC) に従い、有界 (bounded) であることが指摘されている。この点を、(14) を例に取り、考えてみることにする。

- (14) a. Mary promised that she would buy and Frank feared that he would break an expensive Chinese vase.  
b. \* Mary promised [<sub>CP</sub> that she would buy] last week and Frank feared [<sub>CP</sub> that he would break] yesterday an expensive Chinese vase.

Abels (2003) では、RNRは語順 (word order) に影響を与えることはなく、その結果として、RNR要素である従属節内の要素を主節の要素を超えた位置に生起させることはできないと指摘されている。すなわち、(14b) が非文法的なのは、RRCに違反し、従属節内の要素an expensive Chinese vaseを主節の副詞的要素yesterdayの右側の構造的に高い位置に置いたことによる。

## 1. 2. 動詞句削除 (VP Deletion)

(7a) のRNR要素に対するin-situ分析を支持する第二番目の証拠は、McCawley (1982:100) が指摘する動詞句削除に係る現象である。<sup>8</sup>

- (15) a. Tom admires, and is sure that everyone else admires, Adolf Hitler, but of course you and I don't. [= admire Adolf Hitler]  
b. Tom talked, and is sure that everyone else talked, about politics, but of course you and I didn't. [= talk about politics; ≠ talk]

<sup>8</sup> Abels (2003:49) も動詞句削除に伴う不在動詞句を適切に解釈するためには、RNR要素は動詞句内になければならないと主張する。(下線は筆者の加筆である。)

(i) \*Jane talked about and/but Frank didn't the achievements of the syntax students.



(15) は動詞句削除が適用された文で、不在動詞句 (a missing VP) の解釈が問題になる。ここで重要な点は、RNRが適用され、等位構造の節点に付加されていると分析されてきたRNR要素も、不在動詞句内に含まれなければならないという点である。すなわち、(15a) の不在動詞句はadmire Adolf Hitlerであり、admireのみではない。また、(14b) の不在動詞句はtalk about politicsであり、talkのみではない。この不在動詞句の解釈が示していることは、RNR要素は本来の位置、すなわち、動詞句内にあるということである。<sup>9</sup>

### 1. 3. 前置詞句からの抜き出しの禁止

Ross (1967:96-98) では、RNRには前置詞句からの抜き出しを禁じる制約<sup>10</sup> が適用されないことが指摘されている。<sup>11</sup> この制約にRNRが一見したところ従わないように思われる。というのは、(16) が文法的だからである。

(16) I am confident of, and my boss depends on, a successful outing at the track.

(Ross 1967:126)

(16)の名詞句a successful outing at the trackは前置詞句からの抜き出しを禁じる制約が規定する環境内にある名詞句であるが、(16) は文法的である。この現象は、RNR要素は元々の位置に存在すると主張する仮説(7a)を組み込んだ分析を支持するものである。<sup>12</sup> RNR要素は前置詞句から抜き出されているわけではないのである。

<sup>9</sup> 動詞句前置・V'代用・N'代用・強調の再帰代名詞に関わる現象に基づく、RNR要素が等位構造の一番右側の等位項になければならないとする議論の詳細に関しては、Kimura (1986) を参照のこと。

<sup>10</sup> No NP may be moved to the right out of the environment [ P\_ ] PP. (Ross 1967:125)

<sup>11</sup> Ross (1967) も、Wexler and Culicover (1980) と同様に、RNRが複合名詞句制約 (CNPC) と等位構造制約 (CSC) に従わないことを指摘している。ただし、CNPCやCSCに従う場合もあることが指摘されている。

<sup>12</sup> McCloskey (1986:184-185) では、前置詞句からの抜き出しを禁じる制約が重名詞句転移には適用されるが、RNRには適用されないことが指摘されている。

- (i) a. Nil se in aghaidh an dli a thuilleadh a bheith **ag eisteacht le** no **ag breathnu ar**  
is-not it against the law anymore be (-fin) listen (prog) with or look (prog) on  
raidio agus teilifis an Iarthair.  
radio and television the West (gen)  
'It is no longer against the law to listen to, or to watch, Western radio and television.'
- b. Brian Mag Uidhir ... **ag glacadh le** agus **ag cabhru le** plandail a dtailte fein  
Brian Maguire take (prog) with and help (prog) with planting their lands reflex  
'Brian Maguire ... accepting, and helping with, the planting of their own lands.'
- (ii) \*Bhi me ag eisteacht **le** inne **clar mor fada ar an raidio faoin**  
was I listen (prog) with yesterday program great long on the radio about-the  
**toghachan.**  
election  
'I was listening yesterday to a great long program on the radio about the election.'

McCloskey (1986:185) は、"There is no trace in Right Node Raising structures. Rather, the displaced constituent actually and directly is the object to both prepositions simultaneously." ということを指摘している。また、Steedman (1996) やHartmann (2000) も、前置詞残留 (preposition stranding) が重名詞句転移では許されないが、RNRでは許されることを指摘する。

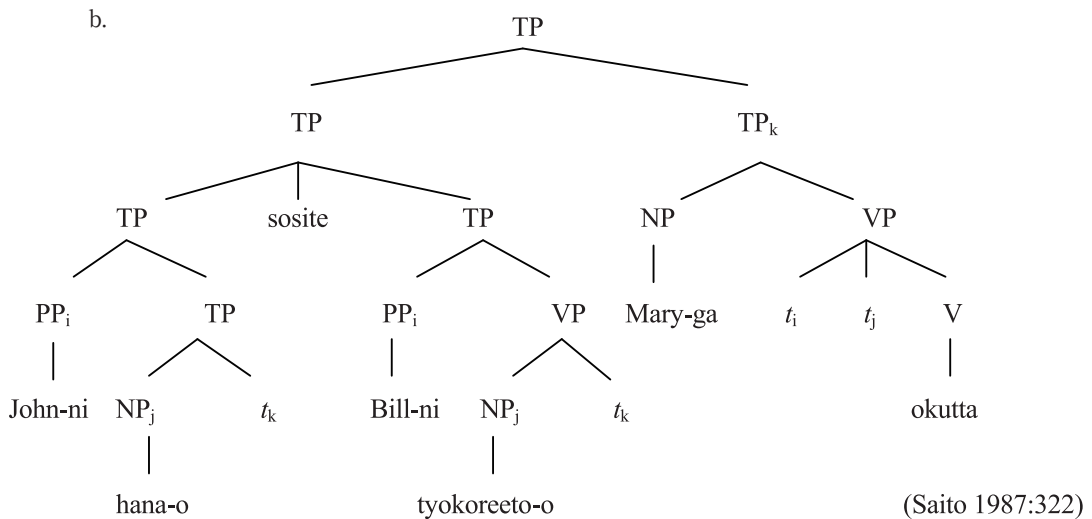
#### 1. 4. 適正束縛条件 (PBC) ・束縛条件 (C)

Saito (1987) は, RNRの特性について, 適正束縛条件 (Proper Binding Condition: PBC) や束縛条件 (C) (Binding Condition (C)) との関連に基づき, 議論している。

- (17) a. Proper Binding Condition (Fiengo 1977) : Traces must be bound.  
 b. Binding Condition (C) (Chomsky 1981) : A pronoun cannot c-command its antecedent.  
 (Saito 1987:321)

PBCとRNRの関係を, 次の(18)を例にとり, 考えてみることにする。

- (18) a. John-ni hana-o, sosite Bill-ni tyokoreeto-o, Mary-ga okutta (koto)  
 -to flower-acc and -to chocolate-acc -nom sent (fact)  
 'Mary sent flowers to John, and she sent chocolates to Bill'



(18) では, Saito (1987) によれば, 主語Mary-gaと動詞okuttaを含む文 (TP<sub>k</sub>) がRNRの適用を受けている。右方向へのかき混ぜ (rightward scrambling) は許容されないので, (18a) はかき混ぜではなくRNRの適用を受けて導かれたとSaito (1987) は分析する。Saito (1987) の分析による(18)の派生過程は, 以下の通りである。まず最初に, 後置詞句John-niとBill-ni, 目的語名詞句hana-oとtyokoreeto-oがTPにかき混ぜで付加され, 最後に, 文がRNRの適用を受けて, (18) が導かれるとする分析である。(18b) が (18a) の構造である。しかしながら, この分析では, (18) の痕跡t<sub>i</sub>とt<sub>j</sub>を構成素統御する先行詞がない。従って, PBC (17a) に違反し, この表示 (representation) は排除されるはずであるが, 実際は, 文法的である。このことから, Saito (1987) は, RNRにPBCは課されないと主張する。



次に、束縛条件 (C) とRNRの関係を、次の (19) を例にとり、考えてみることにする。

- (19) a. \* Mary-ga ototoi, sosite kare<sub>i</sub>-ga kinoo,  
 -nom the-day-before-yesterday and he -nom yesterday  
 [<sub>NP</sub> [<sub>S</sub> John<sub>i</sub>-ni aitagatte ita] hito]-o tazuneta (koto)  
 -to wanted-to-see person-acc visited fact  
 'Mary visited the person who wanted to see John<sub>i</sub> the day before yesterday,  
 and he<sub>i</sub> visited the person who wanted to see John<sub>i</sub> yesterday'
- b. \* Mary-ga Nancy-o, sosite Susan-ga kare<sub>i</sub>-o,  
 -nom -acc and -nom he-acc  
 [<sub>NP</sub> [<sub>S</sub> John<sub>i</sub>-ni aitagatte ita] hito]-ni syookaisita (koto)  
 -to wanted-to-see person-to introduced fact  
 'Mary introduced Nancy to the person who wanted to see John<sub>i</sub>,  
 and Susan introduced him<sub>i</sub> to the person who wanted to see John<sub>i</sub>' (Saito 1987:324)

RNR構文を導くのが移動規則であると仮定すると、(19a) の代名詞kareと (19b) の代名詞kareが構成素統御する指示表現は存在しない。というのは、RNRの適用により、指示表現のJohnは代名詞が構成素統御しない位置にあるからである。(樹形図 (18b) を参照のこと。) しかしながら、予測に反して、実際は、(19a, b) は非文法的である。このことから、Saito (1987) は、RNRが代名詞の同一指示性 (pronominal coreference) を変えることはないと主張する。

英語のRNR構文も束縛条件 (C) に従わないことは、Levine (1985) やMcCawley (1988) 等で指摘されている。

- (20) a. \* She<sub>i</sub> disliked, and I hated, that picture of Mary<sub>i</sub>.  
 b. Mary<sub>i</sub> disliked, and I hated, that picture of her<sub>i</sub>. (Levine 1985:496)
- (21) \*She<sub>i</sub> said, and I happen to agree, that Mary<sub>i</sub>'s brother needs a new car.  
 (McCawley 1988:545)

(20a, 21) から、RNRが代名詞の同一指示性を変えないことがわかる。RNR要素が移動規則の適用を受け、上位の等位構造にChomsky付加されたと分析すると、指示表現Maryは代名詞herに構成素統御されない位置にある。従って、文法的であると予測されるが、実際は、非文法的である。(20-21) の文法性から、英語のRNRでも束縛条件 (C) の効果が依然として現われることがわかる。

RNR要素の移動を仮定しない、仮説 (7a) を組み込んだ本稿の分析では、RNR要素は元々の位置に生起する。従って、構成素統御されなければならない痕跡はそもそも存在せず、PBCに従わないと言う必要はない。また、RNR要素内にある指示表現が代名詞に構成素統御される位置にあることになり、正しく、束縛条件 (C) の違反であると分析することができる。

## 2. RNR要素のEx-Situ分析

第2節では、全域的な対応関係が観察されず、すべての等位項にRNR要素が一律に生じる基底構造を仮定することのできない場合、すなわち、仮説(7b)を支持する場合を考察する。

### 2. 1. 対称的述語 (symmetric predicates)

Abbott (1976), Jackendoff (1977), Gazdar (1981), McCawley (1982), Abels (2003)等で指摘されているように、RNR構文のRNR要素として、対称的述語が生じる場合がある。この場合、移動あるいは削除規則に基づくRNRの分析では説明を与えることができない。この点を(22)を例にとり、考えてみることにする。

(22) a. John avoided and Bill ignored  $\left\{ \begin{array}{l} \text{similar issues.} \\ \text{the same man.} \end{array} \right\}$

b. John whistled and Mary hummed  $\left\{ \begin{array}{l} \text{together} \\ \text{at equal volumes.} \end{array} \right\}$

(23) a. John avoided  $\left\{ \begin{array}{l} \text{similar issues} \\ \text{the same man} \end{array} \right\}$  and Bill ignored  $\left\{ \begin{array}{l} \text{similar issues.} \\ \text{the same man.} \end{array} \right\}$

b. \* John whistled  $\left\{ \begin{array}{l} \text{together} \\ \text{at equal volumes} \end{array} \right\}$  and Mary hummed  $\left\{ \begin{array}{l} \text{together} \\ \text{at equal volumes.} \end{array} \right\}$

(Jackendoff 1977:192-193)

対称的述語を含む(22)の派生について考えてみることにしよう。Jackendoff (1977)によれば、(22)の文は、CRやRNRで導くことはできない。というのは、想定される基底構造(23)は意味が異なるか非文法的だからである。(23a)は(22a)とは意味が異なる。規則の適用が意味を変えないことを仮定すると、(22a)と(23a)を規則で関係づけることはできない。また、(23b)は非文法的である。これは、(22)には基底構造を仮定することができないということを意味する。

### 2. 2. 分離先行詞 (split antecedents)

Erteschik-Shir (1987)は、RNR構文が示す、相反する特性を指摘している。<sup>13</sup> その特性とは、i) RNR要素がすべての被接続要素にあり、しかも元々の位置にあるかのような特性 (the RNR constituent behaves in many respects as though it is “still” situated in each of the gaps in the conjuncts)とii) RNR要素が元々の位置にはないと思われる特性 (the RNR constituent cannot originate in these gaps) のことである。そして、RNR構文の特性 ii)を支持する現象として、代名詞の分離先行詞の現象を指摘している。<sup>14</sup> この点を、次の(24)を例に取り、考えてみよう。

(24) I thank Mary and respect Susan, for  $\left\{ \begin{array}{l} \text{their} \\ *her \end{array} \right\}$  help. (Erteschik-Shir 1987:110)

(24) の代名詞herがMaryとSusanを指示することはできず、この場合の(24)は非文法的である。他方、代名詞theirがMaryとSusanを先行詞とすることができることからわかる。ここでの問題は、for their helpは動詞thank及びrespectが述語となる節の等位項にRNR要素として生じることができないということである。全域的な対応関係が観察されず、すべての等位項にRNR要素が一律に生じる基底構造を仮定することができないことを示す現象である。これは、仮説(7b)を示持する現象である。

### 3. まとめ

RNR構文の諸特性を適切に分析するために、2種類の異なる構造及び派生過程を有する構文として、RNR構文は全域的RNR構文と対称的RNR構文に峻別されなければならないことを論じた。その際、RNR要素の位置及びその派生過程に対して、次の2点を組み込んだ分析を提案し、その妥当性を検証した。

#### (7) a. RNR構文のin-situ分析：

RNR要素は、一番右側の被接続要素内の元々の位置にある。

#### b. RNR構文のex-situ分析：

RNR要素は、すべての被接続要素に多重に支配されている。

第1節では、RNR構文が、i) 島の条件に従わない、ii) 動詞句削除の先行詞としてRNR要素が含まれる、iii) 前置詞句からの抜き出しが（一見したところ）許される、iv) 適正束縛条件が課されない、v) 束縛条件(C)が課されるという言語現象を観察した。これらの現象は、RNR要素が移動されることなく元々の位置にあることを示唆し、仮説(7a)の妥当性を示しているように思われる。第2節では、RNR要素として、対称的述語と分離先行詞が関わる言語現象を観察した。この現象は、全域的な対応関係が観察されず、すべての等位項にRNR要素が生じる基底構造を仮定することができないという点で、仮説(7b)の妥当性を示唆する現象であることが示された。本稿では、従来のRNR構文に対する提案とは異なり、RNR構文を適切に分析するためには、RNR構文のin-situ分析とex-situ分析の両方、すなわち、仮説(7)を組み込んだ分析を仮定しなければならないことを論じた。

<sup>13</sup> Erteschik-Shir (1987) は、Williams (1978) のAcross-the-Board (ATB) format に基づく分析を提案している。

<sup>14</sup> 分離先行詞は、Jackendoff (1977) で指摘されているように、関係詞節の外置等でも観察されている。

## 参考文献

- Abels, Klaus 2003. "Right Node Raising: Ellipsis or Across the Board Movement," *Proceedings of NELS* 34, 45-59.
- Abbott, Barbara 1976. "Right Node Raising as a Test for Constituenthood," *Linguistic Inquiry* 7, 639-642.
- An, Duk-Ho 2009. "Right Node Raising as PF Coordination Reduction," *Japanese/Korean Linguistics* 16, 347-361.
- Banfield, Ann 1981. "Stylistic Deletion in Coordinate Structures," *Linguistic Analysis* 7, 1-32.
- Bošković, Željko 2004. "Two Notes on Right Node Raising," *University of Connecticut Working Papers* 12, 13-24.
- Chalcraft, Faye 2006. "Right Node Raising as Ellipsis: Evidence from (What the) British do," *Snippets* 12, 7-8.
- Chomsky, Noam 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Erteschik-Shir, Nomi 1987. "Right Node Raising," *MIT Working Papers in Linguistics* 9, 105-117.
- Fiengo, Robert 1977. "On Trace Theory," *Linguistic Inquiry* 8, 35-81.
- Gazdar, Gerald 1982. "Unbounded Dependencies and Coordinate Structure," *Linguistic Inquiry* 12, 155-184.
- George, Leland M. 1980. *Analogical Generalizations of Natural Language Syntax*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Ha, Seungwan 2006. "Multiple Dominance CAN'T, but Ellipsis CAN account for Right Node Raising," *CLS* 42, 17-31.
- Haegeman, Liliane and Jacqueline Guéron 1999. *English Grammar: A Generative Perspective*, Oxford, UK: Blackwell Publishers.
- Hankamer, Jorge 1979. *Deletion in Coordinate Structure*. New York: Garland.
- 原口庄輔・鷲尾龍一 1988.『変形』（現代の英文法 11）東京：研究社
- Hartmann, Katharina 2000. *Right Node Raising and Gapping: Interface Conditions on Prosodic Deletion*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Hudson, Richard A. 1976. "Conjunction Reduction, Gapping, and Right-Node Raising," *Language* 52, 535-62.
- Ince, Atakan 2009. "On Right Node Raising," *Proceedings of the 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFSL)* [MIT Working Papers in Linguistics 58], 165-180.
- Jackendoff, Ray S. 1977. *X' Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kimura, Norimi 1985. "An Interpretive Analysis of Right Node Raising in English," *Tsukuba English Studies* 4, 63-88.
- Kimura, Norimi 1986. "Right Node Raising: A Null Anaphor Analysis," *English Linguistics* 3, 118-133.
- Kluck, Marlies 2007. "The Perspective of External Remerge on Right Node Raising," *CamLing* 2007, 130-137.
- Kluck, Marlies and Mark de Vries 2008. "The Interaction of Right Node Raising and Extraposition," *Snippets* 18, 10-12.
- Lakoff, George and John, R. Ross 1970. "Two kinds of And," *Linguistic Inquiry* 1, 271-271.
- Levine, Robert D. 1985. "Right Node (Non-) Raising," *Linguistic Inquiry* 16, 492-497.
- Maling, Joan 1972. "On "Gapping and the Order of Constituents"," *Linguistic Inquiry* 3, 101-108.
- McCawley, James D. 1982. "Parentheticals and Discontinuous Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 13, 91-106.
- Neijt, Anneke 1979. *Gapping*. Dordrecht: Foris.
- Postal, Paul M. 1974. *On Raising*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ross, John R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph.D. Dissertation, MIT. (Reproduced by the Indiana University Linguistics Club 1968)
- Sabbagh, Joseph A. 2003. "Ordering and Linearizing Rightward Movement," *WCCFL* 22, 436-449.
- Saito, Mamoru 1987 "Three Notes on Syntactic Movement in Japanese," In *Issues in Japanese Linguistics*, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 301-350. Dordrecht: Foris.
- Steedman, Mark 1996. *Surface Structure and Interpretation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Wexler, Kenneth and Peter, W. Culicover 1980. *Formal Principles of Language Acquisition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Wilder, Chris 1999. "Right Node Raising and the LCS," *WCCFL* 18, 586-598.
- Williams, Edwin 1978. "Across-the-Board Rule Application," *Linguistic Inquiry* 9, 31-43.